

## 第202回 「元気に百歳」クラブ「道草」(第11回通信句会)開催

総選挙の告示がなされ、TV、新聞では、各党党首や、予想される候補者の動向を伝える報道で賑わっています。おそらく今度の選挙の争点の一つになると思われる「新型コロナウイルス感染症」の感染者数は、確実に減少してきています。接種したワクチンの効果も証明されてきているようですし、治療薬の改良というか、新薬品開発の情報も聞こえてきます。コロナ禍を取り巻く環境もかなり変わって来るのかも知れません。

私たち俳句サロン「道草」の方は、通信句会という形式が定着してきており、202回目の10月句会も、次の17名の方々の参加のもとに、円滑に実施することが出来ました。

芦川創風さん、板倉歌多音さん、井上蒼樹さん、太田一光さん、奥田和感さん、  
金田月草さん、君塚明峰さん、木村栄女さん、高瀬荻女さん、辻柴楽さん、  
手嶋錦流さん、中島憧岳さん、原晶如さん、船戸清助さん、本間傘吉さん、  
森田多佳さん、芦尾白然(17名)。

今月の兼題は、兼題1「案山子」、兼題2「林檎」、当季雑詠の自由題「晩秋」の3句を詠むことです。そしてその句から、皆さんの心の琴線を振るわせ、選ばれた私たちの晩秋の優秀句は次の通りです。どうぞご高覧下さい。

### 兼題1. 「案山子」

- |                    |    |       |
|--------------------|----|-------|
| ◎『大富士を真向ひに据ゑ案山子かな』 | 栄女 | 天2    |
| ◎『捨案山子遊びに飽きて散る雀』   | 傘吉 | 天1☆11 |

### 兼題2. 「林檎」

- |                     |    |       |
|---------------------|----|-------|
| ◎『初林檎信濃の朝を箱に詰め』     | 明峰 | 天2☆13 |
| ◎『信州の田舎顔して林檎来る』     | 晶如 | 天2    |
| ◎『逆上がり出来ぬ少年青林檎』     | 多佳 | 天1    |
| ◎『ジャケットで林檎を磨き丸かじり』  | 創風 | 天1    |
| ◎『りんご煮るダルトタタンや家族の香』 | 荻女 | 天1    |

### 当季雑詠の自由題 (=秋=)

- |                   |     |      |
|-------------------|-----|------|
| ◎『柿熟し落ちるがままの空家かな』 | 多佳  | 天3☆9 |
| ◎『風いでて雲ひとはげや十三夜』  | 荻女  | 天2   |
| ◎『露草は可憐に見えてたじろがず』 | 月草  | 天1   |
| ◎『よく冷やす至福のおやつ熟し柿』 | 歌多音 | 天1   |

兼題1. では、栄女さんの句「大富士を真向ひに据ゑ案山子かな」が、高得票の天賞二つを獲得しました。案山子の真向かいに大富士を据えることで、スケールの大きな句になり、まるで案山子が大富士に向かって胸を張っているように感じられました。次に傘吉さんの句「捨案山子遊びに飽きて散る雀」が、天賞一つと最多得票賞(☆印)を獲得しました。この句は中七、下五に「遊びに飽きた雀」を置き、飽きて散る雀の姿と、捨てられた案山子を対比させて、秋の寂しさを表現し、読者の琴線を振るわせたとでしょう。

皆さんもそうでしょうが、数日間とは言え、兼題の「案山子」に取り組みました。小生も幼い頃からの案山子との接点を思い起こし、その懐かしさに浸っておりました。以後にもし、案山子とこのような状況で対面することがあれば、案山子を見る目が変わっていると思います。

兼題2. では、明峰さんの句「初林檎信濃の朝を箱に詰め」が、天賞二つと圧倒的な得

栗の最多得票賞（☆印）を獲得しました。この句の天賞推挙のコメントに「初林檎が届いた箱を開けた時の爽やかな信濃の朝の香りの描写が素晴らしい」とありますが、これは中七、下五の「信濃の朝を箱に詰め」と、箱に入っているものは、林檎だけでなく「信濃の朝」が入っていたことを指すのだと思います。次に晶如さんの句「信州の田舎顔して林檎来る」も、高得票で天賞二つを獲得しました。この句は上五、中七で「信州の田舎顔して」と、届いた林檎の色艶と味に、送って下さった信州人の銜いのない朴訥さが滲み出ていることを読者に伝え、読者もこれに感動したのだと思われます。お二方とも実に見事な表現でした。次に、多佳さんの句「逆上がり出来ぬ少年青林檎」が、高得票の天賞一つを獲得しました。この句は「鉄棒の逆上がりの出来ない少年を青林檎に擬え、早く赤く熟成するようにと、願うのと同じような気持で、少年を応援されているのでしょう。

次に創風さんの句「ジャケットで林檎を磨き丸かじり」が、天賞一つを獲得しました。ジャケットの袖で林檎を磨いて丸かじりをしたことを句にされたのですが、ジャケットは冬の季語でしたので、新設の「ひと言」欄で、「季重なり」「季違い」の指摘を受けられました。使った二つの季語の間で、主従の違いが明確である場合は許されるとしても、他に表現方法はなかったかとの指摘なども受けます。危ない言葉には近づかない方が得策ではないでしょうか。次に萩女さんの句「りんご煮るタルトタタンや家族の香」が、天賞一つを獲得しました。ご自宅で作られるタルトタタンという林檎のケーキの香が、もはや家族の香になっていることを表現された句でしょうか。句全体の中からは、ご家族の仲の良さが読者には伝わって参ります。

自由題句では、多佳さんの句「柿熟し落ちるがままの空家かな」が、天賞三つと最多得票賞（☆印）を獲得しました。熟した柿も落ちるがままに、放置されている空家の寂しい情景です。住んでいた方々は、何処に行かれてしまったのか、侘しい秋の情景が読者を感じ深くさせますね。次に萩女さんの句「風いでて雲ひとはげや十三夜」が、天賞二つを獲得しました。いずれの時かの十三夜に見たひとはげの雲、それは十三夜の月にうっすらと架かっていたのかも知れません。そしてあの頃の気がかりなことを、思い出させているのかも知れませんね。

次に月草さんの句「露草は可憐に見えてたじろがず」が、天賞一つを獲得しました。あの青色の可憐な露草の花、しかしこの可憐な花が、平素は滅多なことにはたじろがず、強靱に耐えていることを表現されたのだと思います。読者はその可憐な露草の強靱さに共感されたのでしょうか。次に歌多音さんの句「よく冷やす至福のおやつ熟し柿」が、天賞一つを獲得しました。熟し柿を冷やして食する。読者にはその冷えた美味な熟し柿の味が伝わって来るようです。まさに至福のおやつですね。

今回はオンライン会議で討議し、実施して見ることになった「ひと言」欄を設けて、活用して見ました。何か問題点が発見できたなら、次回のオンライン会議でも、ディスカッションすればよいと思います。俳句は「自得の文学」と言われる一方で、「座の文芸」とも言われます。俳句仲間が集い、そこに句会があり、みんなが投句して、評価し合って成り立つものです。殆ど人間社会の縮図ではないでしょうか。

また俳句では、来月は早々から「冬」に入ります。つまり詠む句の季語は「冬」ということです。皆さんお揃いでお元気にご参加下さる事を祈念します。

（白然記）